

ジャン・ポーランによる定型表現にかんする思索

— マダガスカルにおけることわざの経験から
『タルブの花あるいは文学における恐怖政治』まで —

加 覧 咲

はじめに

ジャン・ポーラン（1884–1968）は、1908年の1月から1910年の11月まで、約3年間マダガスカルに滞在していた。外国人中学校の文学担当教授という職に就き、フランス語、ラテン語、哲学などを教えていたが、途中からマダガスカル語の学習に没頭するようになり、滞在期間の後半になると、とりわけマダガスカルのことわざの研究に打ち込むようになった。1909年10月には、母親であるジャンヌ・ポーランに、「未収集だったマダガスカルの古くからあることわざを、700か800句収集した」⁽¹⁾と書いた手紙を送っている。また、「ことわざの意味論 *sémantique du proverbe*」と題した学位論文を計画していた。一次大戦を挟んで1919年には、ポール・エリュアールに、「あともう1年は『ことわざの意味論』を完成させることで忙しい」⁽²⁾と書いた手紙を送っている。しかし、それから17年が過ぎてもなお論文は未完成のままだった。1936年には、当時ソルボンヌの哲学教授だったレオン・ブランシュヴィックに論文の詳細な計画を書き送り、意見を仰いでいるが、結局この論文が完成することはなかった。ただしこの論文とは別に、1930年にはハインテーニというマダガスカルの民衆詩に関する講演会を行い、それを「ハインテーニ、難解な詩 *Les Hain-tenys, poésie obscure*」という報告書にまとめるなど、様々な形で記録を残している。本稿では、なかでもポーランの考察がよくまとまっている、1925年に公表された『ことわざの経験 *L'expérience du proverbe*』というエッセイ、ならびに1939年に公表された『ハインテーニ *Les Hain-tenys*』というエッセイを扱いたい。

ところで、ポーランの著『タルブの花あるいは文学における恐怖政治 *Les Fleurs de Tarbes ou la Terreur dans les lettres*』（以下、『タルブの花』と略記する。）が出版されたのは1941年のことである。執筆を始めたのは戦後まもない頃だったと言われているので、先述したようにマダガスカルにおける経験を様々な形で著していた時期と重なっていると言える。また、「文学における恐怖政治」が、詩人あるいは批評家が文学から常套句や諸規則を締め出そうとする動きのことであることから分かるように、『タルブの花』においては常套句が議論的になっている。したがって本稿では、マダガスカルにおけることわざを巡る思索が、『タルブの花』における常套句を巡る考察に与えた影響の一端を明らかにすることを試みる。

1 マダガスカルにおけることわざにかんする発見

『ことわざの経験』と『ハインターニ』の2つのエッセイから、ポーランがことわざについていかなる発見をしたのか探っていきたい。

まず初めに、少なくとも当時のマダガスカル人にとって、ことわざは必要不可欠のものであった。その多くが、日常的にことわざを使って会話をしていたし、なかでもメリナ族は、喧嘩が起きると、ことわざを含む詩「ハインターニ」を使って聴衆を交えた口論を行うことで決着をつけるという文化をもっていた。ポーランがマダガスカル語の学習に熱中し始めた頃、最大の難関となったのがこうしたことわざの扱い方だった。マダガスカル人と自然な会話ができるようになるまで挫折を繰り返し、その原因を探る経緯が書かれているのが『ことわざの経験』である。また、「ハインターニ」を文学作品として読む体験と、口論で実際に使用されているものを聞く体験とを比較して、とりわけことわざの解釈の問題について考察を加えているのが『ハインターニ』である。

i 『ことわざの経験』より

ことわざの意味を聞かれたとき、その文字通りの意味を答えて満足するような人はまずいないだろう。普通それに与えられる解釈を指して、そのことわざの意味と呼んでいるはずだ。ポーランもそうした意味を教えてもらおうとして、知り合いのマダガスカル人女性にとあることわざについて尋ねる。(筆者にはマダガスカル語の教養がないので、以下ポーランのフランス語をそのまま引用することをお断りしておく。) そのことわざは以下の通りである。

œuf d'alouette au bord de la route ; ce n'est pas moi le coupable, c'est l'alouette.⁽³⁾
道端のヒバリの卵。とがむべきは私ではなく、ヒバリである。

そうすると、以下のような質問が返ってきたと言う。

« Mais où l'as-tu entendu? De quoi s'agissait-il? »⁽⁴⁾
「でも、それどこで聞いたの? 何の話だった? 」

忘れてしまっていたので彼女の質問に答えられず、とにかく意味を教えてくれるようにポーランがせがむと、彼女はしばらく考えてからこう答えた。

Voici, tu es marchand de Rafia. Tu viens au marché ; ton premier client, c'est un paysan qui ne connaît pas la valeur de choses. Le prix que tu lui demandes, quand ce serait dix piastres, il le donne. Et ton voisin te dit : « Ce

n'est pas bien, tu voles ce pauvre homme. » Alors toi : « Tu plaisantes, c'est sa bête qui l'a volé. *Œuf d'alouette au bord de la route ; ce n'est pas moi le coupable, c'est l'alouette.* »⁽⁵⁾

あなたはラフィア売りの商人で、市場に来ているの。最初のお客さんは、ものの価値をよく知らない農民。あなたが彼に要求した値段は10ピアストルだったんだけど、彼はその通り支払った。それで隣の人があなたにこう言う。「良くないなあ。気の毒な彼を騙したね。」そうしたらあなたはこう言うの。「冗談言わないでくれ、あいつが間抜けだから盗まれたんだ。道端のヒバリの卵。とがむべきは私ではなく、ヒバリである。」

ポーランはこの返答を聞いて、なぜ「悪いのは私ではなく、ヒバリがそれをもっとよく隠しておけばよかつただけのことだ」⁽⁶⁾ というように噛み砕いて教えてくれないのかと尋ねたが、無視されるという結果に終わったようだ。

注目したいのは、ことわざについて教えてくれた女性が、ことわざの解釈には触れず、それを具体的な文脈に置いてただ示したことだ。同じような経験をいくつも経たあと、ことわざの意味は、文脈から切り離して語ることでできないものだという事にポーランは気付く。すなわち、ことわざは使用されるたびに異なる意味を発明されるのであって、その場合の意味は、具体的な状況や語り手の心情のような「事柄 chose」になると述べられている。

Il semble que le sens ne soit pas ici un fait stable, simple, donné avec le proverbe, mais à propos de ce proverbe une invention et comme un exercice.⁽⁷⁾

意味は、ことわざと共にあたえられる、簡潔で安定した事実ではなく、ことわざについての発明や、まるで練習のようなものであるように思われる。

したがって『ことわざの経験』から分かることは、ことわざとその解釈としての意味は安定した結びつきを持つものだという前提が覆されたということだ。ことわざはそれ自体意味を持つわけではなく、使用されるたびに語り手によって新たな意味、あるいは「事柄」と結び付けられる。

ここでポーランが強調しているのは、文脈に位置づけられる前の「言葉 phrase」としてのことわざと、使用された後の「事柄」としてのことわざとの間に、「裏返し retournement」と言えるような結びつきが成立することだ。⁽⁸⁾ すなわち、聞き手にとって予測のつかないような意外なことわざの使い方でありながらも、語り手にとってはそれが真実なのだろうと納得できる時、文字通りの意味を持つ言葉としてのことわざと、新しい「事柄」となったことわざの二つが、説明可能な必然性を持たないのに納得できる仕方で結びつくということである。この一つ目の状態から二つ目の状態への移行のことが気になるあまり、マダガスカル人たちは、議論の最中であっても自分の意見を忘れて聞き入ってしまうとポーランは分析した。さらに、この不思議な結びつきが成立するところに、議論におけることわざの使い方の「成功 succès」があると述べている。⁽⁹⁾

ii 『ハインターニ』より

先述したようなことわざの見せる「裏返し」が、『ハインターニ』では異なる角度から語られている。

ポーランは初めのうち、マダガスカル語の読み書きを自分に禁じ、聞くことと話すことだけに集中していたらしい。ただし、ハインターニについては別で、最初の出会いは紙の上だったと述べられている。マダガスカル人に詩を記録する文化はないが、L. ダール司祭という現地フランス人による「マダガスカルの間伝承 le Malagasy Folk-lore」という記録にハインターニが載っていたようだ。その中の一篇を紹介しよう。

Qui passe et ne désire pas a l'air orgueilleux,	通りすぎ求めない人は傲慢そうだが、
Qui désire trop souvent a l'air importun.	求めすぎる人はしばしば煩わしく見える。
Je suis le chien de garde au bord du chemin :	私は道端のカモジグサ
Je ne cherche pas à vous faire tomber	あなたを転ばせたいわけではないのです
Je vous retiens pour que nous parlions. ⁽¹⁰⁾	あなたを引き留めて話をしたいのです。

ポーランはこれを「助言 conseil」の詩として捉えている。最初の二行がことわざに該当し、挨拶に関する礼儀を説くものだと考えたようだ。そして後半三行については、それ自体何かを意味しているのではなく、前半の二行の詩的なメタファーになっていると考えた。しかしこの本を読んだ後、ポーランは聴衆が集まって行われる口論の場で、ハインターニが使われていることを知る。そして、先ほどの詩に関して言うなら、最後の三行のほうがことわざだったことに気付く。その時このことわざあるいはこのハインターニが置かれた議論の文脈は、女性に対してある男性がした打ち明け話だったようだ。そうすると、ことわざの部分、まるでカモジグサが足を引っかけ、転ばせるように見えているかもしれないが、それは女性を引き留めて話をしたいからだ、と解釈しなおすことができる。それを踏まえて最初の二行の意味を検討してみると、男性は傲慢そうに見えたり煩わしく見えたりするかもしれないが、それには見かけによらない別の意図がある、というように捉え直すことができる。この場合は、前半部分のほうが、後半部分の「事柄」としてのことわざの「予告 annonce」になっているとポーランは分析している。

このハインターニの解釈の変化について、「裏返し」とは多少異なるが、「逆さま retourné」になったと述べられている。⁽¹¹⁾ ことわざの変化に注目しておきたい。最初はことわざだと気づかずその文字通りの意味のみを吟味した上で、詩的なメタファーだと思っていたのだった。それは予期せぬ意味を帯びうるかもしれないが、解釈を試みたところで必ずしも意味があるとは限らないように思われた。しかし口論で使用されているものを聞くと、語り手にとっての「真実 vérité」あるいは「事柄」という意味と結びついていた。つまり、ことわざは、やはり文字通りの意味を持つ言

葉となる側面と、語り手の「事柄」としての意味になる側面の二つがあるということになる。そして、この二つの側面が、説明できるような必然的な結びつきを持たない、互いに「逆さま」であるような関係にもかかわらず、不思議と両立してしまうのがことわざなのである。ことわざに関する考察からポーランは言語一般へと話を広げ、以下のように説明している。

le langage et l'expression ne sont pas un milieu inerte et transparent —comme une vitre laisse au paysage son ordre et ses mesures—mais bien un milieu spécifique, possédant ses lois propres de réfraction, et qui nous montre à l'envers —comme une lentille fait les objets et les personnages—chaque événement de l'esprit.⁽¹²⁾

言語と表現は生気のない透明な媒質——まるで風景にその秩序と基準を委ねるようなガラス——ではなく、特殊な媒質であり、それ固有の屈折の法則を持ち、そしてわれわれに逆さまに——まるでレンズが対象や人間を作り出すように——精神の出来事のそれぞれを見せる。

この部分について、ことわざを例にとって考えてみることで、第一部の結論としたい。ここまでポーランの考えを追ってきて分かったことは、いわば、ことわざが全く常套句ではなかったということである。定型表現でありながら、安定した意味を持たず、文脈に位置付けられるたびに異なる意味と結びつくものであった。すなわち、ことわざは安定した意味を持つ記号のように、聞き手から語り手の与えた意味が見えるような、透明なガラスではない。聞き手がそれを自らの視線に従わせようとして、あるいは、自分の既に知っている意味をそこに見出そうとしてのぞき込むと、ことわざはレンズのように、語り手の真意を逆さまに、あるいは歪めて映し出すものである。定型表現あるいは言語のこうしたあり方こそ、ポーランがマダガスカルを経験を経て発見したことだと言えるだろう。

2『タルブの花』における「投影の錯覚 illusion de projection」

第二部では、ポーランの恐怖政治批判の過程を辿りつつ、第一部で見てきたような発見の影響を探っていく。

まず初めに彼が目にしたのは、「言葉の力 le pouvoir des mots」という表現が飛び交う政治的議論の場である。1938年、ヌーボー・カイエ誌が「言葉の力」という通信欄を設けたことを問題視し、ポーランは実際に非難の手紙を書き送っている。ここで言われている「言葉の力」とは、「イデオロギーの戦争」、「民主主義」、「自由」などの抽象的な用語による、人々を混乱させ、意味がよくわからないまま口にするを可能にしてしまう力のことである。政治的に対立する主張を、そうした「言葉の力」によって内容を奪われた空疎なものに見なして批判し合っていたということだろう。こうした議論が、文学の領域に持ち込まれていることをポーランは問題視していた。例えば、レミ・ド・グールモンなどの批評家が、文学作品に常套句を見つかるや否や、作家が言葉に踊らされて

いると判断してしまう。あるいはシュルレアリストなどの詩人自身が、自分の作品から常套句や規則を追い出そうと躍起になっていることも挙げられている。⁽¹³⁾

そこでポーランは、この「言葉の力」が神話に過ぎないと指摘する。その根拠は次の二点に大別できるだろう。まず、政治家たちが、自分の主張ではなく相手の主張だけを問題にすることである。すなわち、自分が相手の思想を信じていないだけに、相手のほうが「言葉の力」に踊らされていると決めつけ、言葉に濡れ衣を着せてしまう。次に、批評家と、彼が批評するところの作家の意見とがしばしば食い違うことである。例えば、一方で、グールモンがシャトブリアンを「文体のとりこ *proie de son style*」になっていると批評するとき、他方でシャトブリアンは「心の波乱にとらわれて *proie de ses orages*」書いたと説明する例が挙げられている。批評家は作家が言葉にとらわれていると決めつけ、先ほどと同様、言葉にいわれのない罪を被せてしまう。以上の二点から分かることは、「言葉の力」とは、明確な根拠を持たないが本当らしく見える神話であるということだ。⁽¹⁴⁾

さらに、「言葉の力」ならびに忌避すべき常套句という神話を本当らしく見せているのは、「投影の錯覚」であるとポーランは指摘する。ここで言う「投影」とは、自分の理解したいことを、あるいは自分の「神話 *mythe*」を言葉に見出そうとすることである。⁽¹⁵⁾それによって生じる「錯覚」とは、他人が自分とは異なる言葉の使い方をしたとき、聞き手はその言葉に自らの「神話」を投影しようとするが、投影は成立せずその言葉の意味が分からないので、語り手のほうが言葉にとらわれて意味を奪われていると判断することである。こうした「投影の錯覚」は、以下のように光学的な錯覚に例えられている。

c'est que nous ne prenons aujourd'hui contact avec les Lettres et le langage même, c'est que nous ne parvenons à les connaître, à les apprécier et tout aussi bien à les continuer nous-mêmes, qu'à la faveur d'un enchaînement d'erreurs et d'illusions aussi grossières que le peut être une illusion d'optique : le bâton brisé dans l'eau, par exemple, ou mieux le rocher qui paraît monter sous les eaux de la cascade. [...] L'on n' imagine pas sans ridicule une hydraulique fondée sur la propriété ascendante des rochers sous les eaux. Mais la Terreur, qui se fonde sur une illusion à peine moins grossière, a pu bizarrement régir nos Lettres, et jusqu'à notre pensée.⁽¹⁶⁾

すなわち、今日われわれは文学と、いや言語とさえも接触してはいないということであり、また、われわれが文学と言語を認識し、また全く同様にわれわれ自身でそれらを維持せしめていくような状態にあるのはただ、水中で折れているようにみえる棒とか、滝水の下から迫りだしてくるようみえる岩などのような、視覚的な錯覚と同程度にはなほだしい一連の誤謬と錯覚によってのみ辛うじて漸くそうなのだということである。[...] 水面下の岩が迫り上がってくるという特徴に基づいた水力学など馬鹿々々しくて考えられもすまい。ところが恐怖政治はほとんど同じ程度にはなほだしい錯覚の上に築かれているにもかかわらず、奇妙なことにはわが文学を、さらにはわれわれの思想をも支配しているのである。

この光学的な錯覚の比喩は、第一部ですで見えたレンズの比喩を思い起こさせる。第一部ではレ

レンズとしての定型表現あるいは言語が問題になっていた。重要なことは、定型表現であってもその意味と安定した関係を持たないということであり、透明なガラスのような記号ではないということだった。ここでも、問題になっているのはやはり常套句や抽象語など多様な意味を帯びうる言葉である。もし仮に「投影」を、安定した意味を持たないはずの定型表現を所有すること、すなわち自分の知っている意味だけがその表現と安定的に結びつくと言えらるなら、それは、使用されるたび意味が変わるようなレンズとしてのことわざを、一つの意味と安定的に結びつき、透明なガラスのように聞き手から語り手の与えた意味が見えるものだと誤解することと重なり合う。そうであるならば、恐怖政治家の根本的な誤解は、定型表現や言語を、本来なら意味が一つに定まるはずのもの、すなわち常套句だと思い込んでいるところにあると言えらるだろう。したがって、マダガスカルにおけるポーランの発見は、『タルブの花』における恐怖政治批判の中心的な論拠として見出すことができるとひとまず結論づけることができそうだ。

3 『タルブの花』における「転倒 *renversement*」

第二部では、恐怖政治家の根本的な誤解が明らかになった。しかし、ポーランが恐怖政治を止めるために提案した解決策は、むしろその誤解を推し進めるようなものである。

Les clichés pourront retrouver droit de cité dans les Lettres, du jour où ils seront enfin privés de leur ambiguïté, de leur confusion. Or il devrait y suffire, puisque la confusion vient d'un doute sur leur nature, de simplement *convenir*, une fois pour toutes, qu'on les tiendra pour clichés. En bref, il y suffit de *faire communs* les lieux communs — et avec eux ces lieux plus vastes : règles, lois, figures, unités, qui suivent même fortune et relèvent des mêmes lois. Il y faudra, tout au plus, quelques listes et quelque commentaire ; et pour commencer, un peu de bonne volonté, une simple décision. Qui la refuse, s'il demeure fidèle au même souci d'entente et de communion qui animait secrètement la Terreur — et qui se poursuit ici en plein jour?⁽¹⁷⁾

紋切り型は、曖昧さや混乱をようやく取り除かれたその日から、文学の世界にふたたび市民権を取戻すことができるであろう。ところでそのためには、ただそれを紋切り型だとみなすことを決定的に認めるだけで足りるはずであろう、というのは混乱はその性質に対するある疑いから生じているのであるから。要するに、常套句を常套句にし——また共に同じ運命を辿り同じ法則に従うところの、さらに広範な常套句すなわち規則や法則や比喻や三単一の法則などを常套句にするだけで足りるのだ。せいぜいいくばくかのリストといくばくかの注釈が要るだけであろうし、まず手始めに僅かばかりの善意と単なる決意とがあればいいのだ。もしも恐怖政治にひそかに生気を吹きこんでいるところの——そしてここにおいては明らかに追求されているところの——理解と一致への同じ関心に対して忠実であろうとする者であるならば、誰がそれを拒むであろうか？

この直前の部分で、常套句が本当は恐怖政治家の考えるようなものではなく、無数の意味を帯び

うるものであり、使用されるたびに異なるものになることが述べられている。そして、そのようにして彼らの誤解を一旦解いたあと、引用部分では、ポーランの考える常套句の使い方を述べることはせずに、常套句の正体が分かった上で改めて恐怖政治の誤解を推し進めてみせているのだ。すなわち、恐怖政治の望む通り、混乱を招いて精神を脅かすことのない言葉を求めるなら、言葉の意味を「注釈 *commentaire*」や「リスト *liste*」によって限定し、共通のものにすればよいと述べているのである。たしかに、理論上はそれによって「投影」は起こらなくなるし、「錯覚」も見えなくなるだろう。しかし、実際には、言葉あるいはとりわけ定型表現の意味を一つに限定することは不可能だと少なくともポーランは考えているのだから、彼のこの選択には別の意図を探らなければならない。

そのためには、恐怖政治が、まさに意味が一つに定まる常套句をこそ忌避していたことを思い出す必要がある。彼らにとって、常套句がもたらす混乱は、それが多様な意味を帯びるからではなく、意味が一つに限定されるからこそ、その意味とのつながりが習慣によって意識されなくなることから来ているものだったのだ。常套句はいわば一つの規則であり、形骸化して彼らを縛る鎖のようになったと考えられていたのである。そこで、ポーランの与えた解決策に立ち返ってみると、恐怖政治は、再び自分の嫌うものと出会っていることが分かるだろう。「注釈」や「リスト」という言葉遣いがそれを思わせるように、まさに彼らと対立するはずの修辞学と出会っているのだ。したがって、ポーランは恐怖政治の誤解を解くだけでなく、試みに彼らの主張を推し進めてみると、ある地点で、対立している修辞学とつながってしまうことを示そうとしたと想像することができる。

ある地点でそれら二派がつながることを、ポーランは『タルブの花』の最終章で「転倒」と表現する。恐怖政治と同様、修辞学にも批判検討を重ねた上でその主張を推し進めていくと、恐怖政治に出会うという「転倒」が起きると説明されている。この「転倒」は、第一部で見てきた「裏返し」ならびに「逆さま」の関係を思い起こさせる。重要だったことは、「言葉」としてのことわざと、文脈に位置付けられ「事柄」となったことわざとが、「裏返し」において結びつくことであった。対立しているように思われる二つの側面が、説明できない仕方結びついてしまうのである。それが、「固有の屈折の法則 *ses lois propres de réfraction*」を持つレンズのように、理解不可能な仕方機能する言語なのであった。ここでも、言葉を重んじる修辞学と、思想や感情を重んじる恐怖政治とが、「転倒」において結びつくことが問題になっている。したがって、ポーランのやりたかったことはおそらく、恐怖政治の誤解を指摘し、それを切り捨てることにあったというよりも、むしろ恐怖政治が修辞学と結びつくことを示してみせることで、判断不可能になる地点を明らかにしたかったのではないか。その地点にこそ彼の考える言語の姿があり、そうした言語についてそれぞれの仕方判断しようとしたのが、恐怖政治と修辞学だったのだろう。

第二部と同様、ここにもマダガスカルにおけるポーランの発見の影響を確認することができた。第二部では、恐怖政治の誤解の解き方に、ポーランがすでに経験していた誤解の解き方を見出す

ことができた。ここでは、恐怖政治と修辞学の「転倒」に、ポーランがすでに経験していた、ことわざの二つの姿の「裏返し」の影響を見ることができる。しかしそれだけではなく、『タルプの花』全体の構成、すなわちある立場に立って述べられてきたことが最後の方でひっくり返し、対立する立場とつながってしまうという構成そのものに、『ことわざの経験』および『ハインテーニ』における「裏返し」や「逆さま」の関係を示そうとする構成の影響を見出すことができる。これらすべての著作の不思議な性格は、それが問題にしているところの言語の不思議な性格が説明しがたいものであるがゆえに、それを示そうとして獲得されたものであると言えるだろう。

おわりに

マダガスカルでことわざの研究を始めてから、およそ30年間継続されてきたポーランによる定型表現についての思索の一端を見ることができた。ただし、とりわけ『タルプの花』に注目してみるなら、定型表現に限らずそれが文学的言語一般の問題に発展させられていることが分かる。さらに気になることは、その最終章で次の仕事が予告されていることだ。ポーランによると、それは上述した「転倒」のなかに現れる言語の「神秘 *mystère*」の問題らしい。この問題は、『タルプの花』の3年後、1944年に出版された『詩の鍵 *Clef de la poésie*』で検討されている。今後は言語の「神秘」の問題も視野にいれながら、引き続きポーランの言語観を探っていきたい。

注

- (1) J'ai réuni un certain nombre de vieux proverbes malgaches 700 ou 800 qui n'ont pas encore été réunis. Jean Paulhan, *Cahiers Jean Paulhan n°2 Jean Paulhan et Madagascar*, présentés par Jacqueline F. Paulhan, Éditions Gallimard, 1982, p.72.
- (2) [...] encore un an, je vais être préoccupé de cette sémantique du proverbe jusqu'à ce que je l'aie finie [...]. Paul Éluard, Jean Paulhan, *Correspondance 1919-1944*, présenté par Claude-Pierre Pérez, Édition Claire Paulhan, 2003, p. 51.
- (3) Jean Paulhan, « L'expérience du proverbe » dans *l'œuvre complète*, tome II, Cercle du Livre Précieux, 1966, p. 107.
- (4) *Ibid.*, p. 107.
- (5) *Ibid.*, pp. 107-108.
- (6) Je n'ai rien à me reprocher, l'alouette n'avait qu'à mieux le cacher. *Ibid.*, p. 108.
- (7) *Ibid.*, p. 122.
- (8) *Ibid.*, p. 124.
- (9) *Ibid.*, p. 124.
- (10) Jean Paulhan, « Les Hain-tenys » dans *l'œuvre complète*, tome II, Cercle du Livre Précieux, 1966, p. 70.

(11) *Ibid.*, p. 96.

(12) *Ibid.*, p. 96.

(13) Jean Paulhan, « Les Fleurs de Tarbes ou la Terreur dans les lettres », dans *l'œuvre complète*, tome III, Cercle du Livre Précieux, 1967, pp. 36-37.

(14) *Ibid.*, pp. 45-58.

(15) *Ibid.*, pp. 64-67.

(16) *Ibid.*, p. 67. (ジャン・ポーラン、モーリス・ブランショ、『言語と文学』野村英夫訳、書肆心水、2004年、222ページ)

(17) *Ibid.*, p. 80. (同上、248-249ページ)